

33 大河ドラマと欽ちゃん、そして大谷選手のこと

2026年の大河ドラマはすでに「豊臣兄弟！」で決まっているようですが、尾張の水呑み百姓の子が一代で、戦国時代最大の富と権力を手に入れたのはご存じの通り。その太閤秀吉の弟秀長が主人公で、演じるのが仲野大賀氏だと聞けば、明るいトーンのドラマが予想されますが、史実はなかなか明るいきりではありません。そうした秀吉の身内の悲劇を描ききったのが、司馬遼太郎氏の「豊臣家の人々」（1967年刊）。秀吉の立身出世に巻き込まれ、残らず全員が不幸になっていきます。司馬氏は別のところでも、秀吉の稀代の幸運が身内の幸運を食いつぶしたという主旨のことを書いていたという記憶もあります。何だか怖い話です。

2年後の大河ドラマのことはさておき、今回は「運」について書いてみようと思っています。まずは、「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」（1985年公開のスウェーデン映画）より「（宇宙開発の実験のために）人工衛星スプートニクに乗せられて死んだライカ犬より、ボクの方がまだ幸せだ」という主人公のセリフ。大好きなお母さんのもとを離れて、田舎の叔父さんに預けられる少年は健気で、映画も決して暗いトーンにならずおススメですが、ライカ犬との比較はさておき、運不運や幸不幸に関しては、他人と絶対に比較するものではありません。上を見たらキリがないと言いますが、同い年の著名人なんて、ネットで調べても空しくなるだけです。そうは言っても、今回試しに調べてみたら、ずっと同い年だと思い込んでいた、ハリウッドスターのブラッド・ピット氏はあちらが一つ年上だと知りました。おかげでまだ追いつけるかもと少し安心したところです。

とにもかくにも60年の人生で得た結論は、人それぞれの「運」や「幸運」の総量は決まっているのではないかということです。そうすると、太閤秀吉の並外れた運や幸福が身内の不運や不幸を招いたということも合点がいくわけです。どなたも人生を振り返ってみれば、残念ながらいいことがずっと続くことはなかったけど、悪いことがずっと続いたわけでもないと思われませんか。

フリーアナウンサーの垣花正氏が9月21日の朝日新聞で、コメディアン萩本欽一氏のエピソードを紹介していました。萩本氏は、何かうまくいっていない人や家庭に不幸があった人には、「良かったねえ、お前売れるよ」と声かけしていたそうです。萩本氏もやっぱり、人間の運の総量は決まっていて、失敗したらその分の運は使っていないのだから未来に生かせると考えていたそうです。萩本氏いわく「失敗はね、運の貯金」だそうです。

勉強やスポーツで頑張っている生徒が結果を出せないことも数多く見てきました。努力は実るって言葉を、疑っていた時期もありましたが、今はやっぱり実るなと強く思っています。実る時期がすぐなのか、少し遅いかの違いなわけです。

さて、善行を積んで、運や幸運を引き寄せるという考え方があります。その一方で、世界の終わり、星が砕け人々が奈落に落ちる時、仏が人を救うとしたら、いちいち善人悪人という分別はしないという「悪人正機」という仏教の教えもあります。それでも、やっぱり悪いことよりも良いことをした方が気持ちいいですね。私の言葉では説得力がないので、大谷翔平選手の有名なゴミ拾いの話を最後にします。ゴミ拾いをなぜするんですかと聞かれ、「人が捨てた幸運を拾っている」と答えたそうです。大リーグでの活躍もゴミ拾いのおかげなわけですね。 令和6年12月2日 大村城南高等学校長 中小路尚也